



ゆったり文字を書ける場を

みやぎ生協学校部が毛筆・硬筆書きぞめ指導教室を開催



「何でもいから賞をとりたいです！」と練習に励む子どもたち。4人の先生が指導しました。

2012年12月22日・23日、みやぎ生協学校部が石巻エリアの子どもたちを対象に、仮設住宅の集会所や市役所支所など4カ所で「書きぞめ指導教室」を開催しました。



硬筆も一人ひとり丁寧に指導。

みやぎ生協学校部が石巻エリアの子どもたちを対象に開いた「書きぞめ指導教室」。河北総合センター（石巻市）の教室には、被災のため河北地区おがつに引っ越ししてきた雄勝小学校の子ど

もたちをはじめとした石巻地区の子どもたち15人が参加し、「宮城県小中学校児童生徒書きぞめ展覧会」（仙台市・2月16日～18日開催、宮城県小中学校教育研究会書写研究部会主催）に向けて練習をしました。

子どもたちが目指す展覧会は1947年にスタートし、2013年2月の開催で66回目を迎えます。毎年、県内ほぼすべての小中学校が参加します。

今回の書きぞめ指導教室の発案者であるみやぎ生協学校部の阿部 正則さんは、「震災で学校は仮校舎。狭くて、毛筆をゆったり書ける場所も作品を展

示する場所も少ない。宿題として家に持ち帰っても仮設住宅だと狭くて書くのが難しい。その中でも、字を正しく美しく書きたい、書きぞめをしたいと思っている子がいるはずで、その子たちのために、心置きなく文字を書ける場をつくろうと思ったんです」と話します。

展覧会の字句は、その時々^の世相を反映したものが選ばれ、今年は「夢」や「出発」です。「子どもたちの夢や希望が叶うような書きぞめ教室であり、展覧会であればいいなと思っています」と阿部さんは笑みを浮かべました。

子どもたちが安心して飲める牛乳を届ける めぐみ野^{※1}「角田丸森産牛乳」生産者の取り組み

牛乳のおいしさでメンバー（組合員）からの支持が高いみやぎ生協の「角田丸森産牛乳」。その牛乳が、東京電力福島第一原子力発電所事故による風評で苦境に立たされました。奮闘し続ける角田丸森産牛乳生産組合組合長の渡辺 博さんの取り組みを紹介します。

●届けられなかった牛乳

「めぐみ野 角田丸森産牛乳」（以下、角田丸森産牛乳）は、産直の取り組みを始めて今年で19年になるみやぎ生協のロングセラー商品です。「おいしい牛乳は健康な牛から」との考えのもと、ゆったり動き回れる牛舎や自由に運動できる放牧場で、のびのびと牛を飼育しています。牛の体に負担がかかるので、高カロリーの餌を食べさせて乳脂肪を無理に高めるといったこともしていません。その牛乳が、震災で苦境に立たされました。

まずは、震災によるインフラのストップです。12日後に電気が回復し、集乳は再開しましたが、牛乳に加工する東北森永乳業の仙台工場が津波で被災したため、工場が復旧するまでの2カ月間、「角田丸森産牛乳」は生産できませんでした。

●スウェーデンの対策を参考に

次に直面したのが原発事故による混乱でした。そんな中、渡辺さんのもとに、ある情報もたらされます。「いつもアドバイスをくれる宮城県農政部の人が、震災から1カ月後ぐらいに、チェルノブイリ事故に対応したスウェーデンの酪農家の取り組みを教えてくださいました」

渡辺さんら角田丸森産牛乳生産組合の生産者は、さっそく放射性物



角田丸森産牛乳生産組合組合長の渡辺 博さん(右)とお連れ合い。牛舎にて。

質対策について学び始めました。

「最初は難しかったのですが、その時点では、牧草を食べさせないことと除染が一番の対策だと分かりました」

5月に宮城県から出された牧草給餌の自粛要請は、6月、モニタリング検査の結果を受けてすぐに解除されましたが、渡辺さんらは5月に収穫した牧草は給餌しないことを決断。また、スウェーデンの対策に「除染は土を反転するのが一番効果的」とあるのを見て、牧草地と飼料用デントコーン畑の除染も始めました。徹底して取り組んだ結果、渡辺さんたちの飼料用デントコーン、ホールクロップサイレージ^{※2}については、2011年8月、宮城県のモニタリング検査で給餌OKに。11月から牛に食べさせ始めました。

●風評と戦う

「早め早めに放射性物質対策を行なったおかげで、角田丸森産牛乳は現在に至るまで放射性物質不検出です」と話す渡辺さん。ところが「風評被害は防ぎようがなかった」と肩

を落とします。震災直前の共同購入（宅配）での2011年2月の実績1日平均1,062本と比べると、同年8月は846本、2012年6月は615本にまで落ちています。店舗と合わせても、落ち込みは深刻でした。「普通のスーパーだったら、あんたんこの牛乳はもういらないとされていたと思う。でもみやぎ生協だから応援してくれるんですよ。職員の方や組合員さんが積極的に宣伝してくれたおかげで、店での販売は徐々に回復してきました。いまは何とか売り上げも伸びてきつつあります。子どもたちに安心して飲んでもらえる牛乳をこれからも届けていくため、辛抱しながら前に進もうと思っています」。渡辺さんは、そう決意を語ってくれました。



広い放牧場。ここで牛はのびのび過ごす。

※1 みやぎ生協の産直ブランドの名称。

※2 稲の実と茎葉を同時に収穫し発酵させた牛の飼料。

さまざまな事業でお役立ち度を高めたい

みやぎ生協、宅配水・車検・葬祭・保険の事業でも復興支援



事務所に設置されている宅配水のボトル。

みやぎ生協では、店舗事業、宅配事業だけに限らず、各事業においても復興に向けての取り組みを行なっています。

生協の宅配水を配達する㈱コープ総合サービスは、沿岸地域を中心とした38カ所の設置先にボトルを無

償支援しています。支援数は2012年4月度～10月度の合計で2,147本です。11月度からは、みやぎ生協独自で「被災された方が利用する施設」「水道復旧が遅れている地域の施設」を中心に無償でボトルの支援を行なっています。

車検事業では、車検入庫1台につき50円を「東日本大震災みやぎ子ども育英募金」に寄付する活動を続けています。2012年度累計で11万7,150円(2,343台分)を寄付しました。

また、葬祭事業プリエでは、返礼品カタログ掲載の「子ども未来創造基金対象商品」1点利用につき5円を「東日本大震災みやぎ子ども育英募

金」に寄付しています。支援金額は1,155円(231点分)となりました。

さらに、協同保険センター[※]では、あいおいニッセイ同和損保の自動車保険証券と火災保険証券についているベルマークを集め、被災地の学校へ寄贈をする取り組みを行なっており、11月度までに322点、1万200円が集まりました。また、アフラックのEVER・がんの契約が成立した場合、1件につき代理店から100円、アフラックから100円の、合わせて200円を震災遺児に対して支援しており、4万4,960円(225点分)を支援金として贈呈しました。

[※]みやぎ生協が出資、設立した組合員の保険を担当する関連会社。

岩手県、各所で年末のお振る舞い

岩手県生協連、いわて生協など、被災地域で活躍



田老町仮設住宅での昼食交流。話が弾む。

「消費者行政の充実をめざすネットワークいわて」、「いわて食・農ネット」(両団体とも、岩手県生協連が構成団体として参加)は、2012年12月26日に岩手県宮古市田老地区の仮設住宅で行なわれた「お茶っこ会と弁護士との説明会」終了後、けんちんみそ煮込みうどんなどの炊

き出し支援を行ないました。

これは、「ボランティアをしたい」、「支援の思いを風化させたくないで被災地域に行きたい」などといった大学生協からの声や、「あまり炊き出し支援がない」との仮設住宅からの要望もあり、昨年末の実施に続き開催されたものです。当日は、岩手大学生協の学生委員5人に加え、「消費者行政の充実をめざすネットワークいわて」、「いわて食・農ネット」から12人が参加しました。

また、いわて生協でも、クリスマスと年末に振る舞い企画を行ないました。いわて生協では、12月24日にクリスマスメニュー(ローストチキン、クリームシチュー、ケーキ

など)、29日・30日には、おせちメニューの振る舞いを行ないました。いわて生協からの参加者はのべ93人、それに加え、よどがわ市民生協、ならコープ、おおさかパルコープの計170人の参加者も炊き出しに参加し、陸前高田市、大槌町の仮設住宅計22カ所で振る舞いが行なわれました。



いわて生協振る舞いの様子。

復旧・復興、自分たち高校生が引っ張っていく！

被災地の高校生 10人とフォーラムで意見交換

コープとうきょうや岩手県生協連が支援を行っている※、軽食付き自習スペース「山田町ゾンタハウス『おらーほ』」(岩手県山田町)。そこに通う高校生が、支援者と意見交換をする「子どもたちと一緒に考える被災地の復興支援の今後」(主催：東日本大震災子ども支援ネットワーク、以下ネットワーク)が1月13日に東洋大学白山スカイホール(東京都文京区)にて行なわれました。

※8ページをご覧ください。



支援者と意見交換をする校生たち。

●高校生が支援に関して意見を表明

会場には被災地の高校生10人(岩手県山田町6人、宮城県南三陸町4人)と、現地を支援する団体など計150人が集まりました。

東日本大震災から間もなく3年目を迎えますが、ほとんどの復興計画に中高生への支援は入っていません。ネットワーク事務局長の森田明美さん(東洋大学教授)は、「子ども支援と大人支援の両輪がうまくまわってこそその復興」と言います。

今回招かれた子どもたちは、軽食付き中高生自習スペース「山田町ゾンタハウス『おらーほ』」に通う高校生と、南三陸町で被災した戸倉中学を卒業した高校生です。この自習スペースの運営を森田教授が理事長を務める「NPO子ども福祉研究所」が、また戸倉中学の生徒には「NPOキッズドア」が学習支援を行ってきました。

フォーラムでは、子どもたちから、「家族の収入が安定しない中で、進学をあきらめる子もいる」などの現状報告と、「新しいものを作る『復興』ばかりを追い求めず『復旧』に力を入れてほしい」、「若い人も街づくり

に関われるようにしてほしい」、「水産業の復興ばかりに力が入られるが、農業や酪農などの整備も急いでほしい」といった意見が出されました。また、自習スペース設置期間に制限があることについては、「復興にあたって必要な場所。継続してほしい」という声が多く上がりました。

参加した高校生からは、「子どもという立場で意見を言っても無駄だと思っていたけれど、そうではないことが分かった」、「復旧、復興を自分たちが引っ張っていききたい」などの感想が出されました。

森田教授は、「この声を次につなげるために『大人の覚悟』と『子どもと大人が協働するプロセス』が大切」と話しフォーラムを締めました。

●コープとうきょうを訪問

フォーラム前日の1月12日には、ゾンタハウスの高校生がコープとうきょう本部(東京都中野区)を訪れ、ゾンタハウスを立ち上げ当初から支援している東洋大学の大学生や組合員たちと交流会を行ないました。

コープとうきょうは、もともと「たべる*たいせつキッズクラブ」と

いった組合員活動を中心に森田教授と連携をしており、そのつながりからゾンタハウスに軽食支援を行ったり、大型ガスエアコンを寄贈するなどの支援を行ってきました。コープとうきょうの大矢 憲二さんは、「子どもたちと交流し、組合員から預かった募金がきちんと子どもたちのために役立っていることが実感できました。また、『いつも応援している』というメッセージも直接伝えることができ、良い機会となりました」と話していました。



コープとうきょうの組合員より、高校生へ写真のプレゼント。撮った写真をその場で加工、印刷して高校生に渡しました。



関連記事：本誌22号で、山田町ゾンタハウスについて紹介しています。

情報をすべての人に届けるために

ふるさと絆情報ステーションの取り組み

福島県では、借り上げ住宅や知人宅に避難している県民に被災自治体などの情報を提供するため、2011年11月から「ふるさと絆情報ステーション」(運営:うつくしまNPOネットワーク)を県内13カ所に設置しています。生協店舗では、2011年12月13日にコープあいづ「COOP BESTA にいでら」(会津若松市)、同年12月20日にコープふくしま「コープマートやのめ」(福島市)に設置されました。



ふるさと情報ステーションには、市町村ごとの情報が掲示されている。復興計画に関する情報やイベントの情報など多数。(写真は、コープマートやのめ内)

●県内13カ所にステーションを開設

各市町村の被災者支援に関する最新情報やNPO団体などの情報を提供している「ふるさと絆情報ステーション」。県と災害時応援協定を結んでいる大型小売店舗内などに設置されており、13年1月現在で福島県内13カ所を数えています。

借り上げ住宅等は、一定数の世帯が集まる仮設住宅と比べると、行政や支援団体などの情報を集めにくく、情報格差や地域内での孤立も心配されています。こうしたことから、福島県が「特定非営利活動法人 うつくしまNPOネットワーク」(本部・郡山市)に運営を委託し、ステーションを拠点に、常駐スタッフによる情報提供やサロンの開催などを行なうこととしたのです。

同ネットワークは、県内の各種



1月9日にコープマートやのめで行なわれたサロンの参加者。後列左から2番目が宇田さん。

NPO団体の活動を応援するコーディネーター的な役割を果たしてきました。同ネットワークのふるさと絆情報ステーション担当・宇田 丞さんは「私たちの活動は、市民自らが考え、行動していく、活力ある社会づくりをサポートすることを目的としています。ステーションの運営もこの活動目的の一つとして取り組んでいます」と説明しています。

●情報収集しながら「ほっとできる」場に

コープマートやのめ内のステーションは、毎日午前10時から午後8時までスタッフが常駐、就職相談会やサロンなども定期的を開催しています。

ステーション内は自治体の行政情報や支援団体の情報、就職や税制に関する情報などさまざまな資料が手に取りやすいように整然と並び、お正月らしい絵馬やたこなど季節感のあるディスプレイも好評です。利用者は資料を手にとったり、掲示板を確認しながら、スタッフの方と気兼ねなくおしゃべりもできます。

「スタッフの求人は被災された方も対象にしていますから、利用者の方と同じ目線で話ができます」と宇田さん。

「情報収集の拠点ではありますが、それ以外にも生活の不安から世間話まで気兼ねなく話せる『場』として活用していただきたいですね。最近は富岡町や浪江町などの警戒区域の様子を撮影した写真や発災以前の祭りや行事の写真などにも注目が集まっています。今は避難先がばらばらになっていても、少しずつ各地で避難元の自治会が発足するなど変化も出てきました。しかし、依然としてふるさとに帰るかどうかを含めて今後の人生設計をできない方が多いのです。このステーションが少しでもお役に立てばと思っています。今後は、被災された方以外にも、地域の方々など、多くの人に利用していただけるように、情報の拡充や交流会の開催などステーション機能強化にスタッフと共に力を入れていきたいです」

すべての人が仮の住まいを出られる日まで、支援は続きます。

全国各地で「秋・冬」の保養企画実施

8 生協・生協連が、「福島の子ども保養プロジェクト」を実施



参加した福島の子どもみんなと一緒に（コープぎふ）。

夏に多くの生協が取り組んだ「福島の子ども保養プロジェクト」の受け入れ企画。秋、冬にも、コープあいつ、茨城県生協連、いばらきコープ、パルシステム茨城、コープしずおか、パルシステム連合会、コープぎふ、岡山県生協連が福島の子どもたちを受け入れ、保養企画を実施しました。

コープぎふでは、12月22日～

24日、「岐阜・名古屋でおもいっきり遊ぼう!」を企画し、福島から14組35人の親子が参加。子どもたちは、「日本昭和村」（岐阜県美濃加茂市）、「日本モンキーパーク」（愛知県犬山市）などを訪れ、楽しみました。

1日目の夜に、長良川スポーツプラザ（岐阜県岐阜市）で行なわれた「ふくしまキッズ歓迎交流パーティー」では、組合員がにぎったおにぎりや長良店のオードブルが提供され、さまざまなゲームが行なわれました。また、組合員が参加する地域のボランティアグループから、お菓子の入った手編みのクリスマスブーツのプレゼントもあり、子どもたちは大喜びでした。

参加者からは、「すてきな思い出を胸に、今日からまた福島で、元気に過ごしたいと思います」、「家族単位で連休を利用しての企画はありがたいです」、「また家族で岐阜へ行きたいと思います。周りの人たちにも岐阜のことを話したいと思います」などといった感想が寄せられました。



手編みのクリスマスブーツ。



「伝えたい被災地」

このコーナーでは、ライター荒川和巳さんが被災地に行き、見たもの、感じたものを、お伝えしていきます。

電話で被災地のお店の方に新年のごあいさつをした。「1年があっという間、というのは幸せなことなんだとよく分かりました。こっちは（震災から）時が止まっている感じ……」

ご自宅に戻れず、ご家族が戻らない方は数えきれない。時が止まってしまった人たちに思いをはせることは難しいが、大切なことだ。

私事だが、被災地の県産品を買うことはわりと継続できている。実家の母は喜寿の祝いの膳に「宮古のサンマ」をリクエストしてきた。でも、心を支えるのは難しい。

「『こころの復興』が大事な時期に来ているんですね」

ある店長さんの言葉だ。発災直後と、もうじき3年目となる現在とでは事情が変わってきた。一方で、変わっていない、変えられない事情も山ほどある。インフラもだけど、こころの復興は本当に必要だ。

被災された方は、毎日毎日、いろんなことを選択しながら生きている。ふるさとに戻る・戻らない、家を建て替える・建て替えない、さらに子どもたちの進学をどうするか、など大きなことから、今日は何を食べるか、まで。このストレスはどれほどだろう。

被災された皆さんのこころの復興のために私たちは何ができるか。考え続けたい。



珍しく東京も大雪。雪国の皆さんの苦勞を想う。(1月14日)

ポータル
サイト

被災地に、あったか肌着を贈呈（おかやまコープ）

おかやまコープでは、12年12月3日～14日、「あったか肌着プレゼント募金」に宅配の募金企画と店舗で取り組みました。おかやまコープが「AMDA健康サポートセンター」（岩手県大槌町）に現在望まれている支援について問い合わせた際、「あったか肌着」提供の依頼があり、今回の取り組みとなりました。約217万円の募金が寄せられ、保温性の高い肌着「ミズノ プレスサーモ」（ミズノ）上下約600着が贈られました。



肌着を受け取った大槌町の方々。

ポータル
サイト

運動不足解消に「玄米ダンベル」を（コープこうべ）

コープこうべの白川台コープ委員会では、「玄米ダンベル」2個セットを40袋作り、みやぎ生協に贈りました。これは、冬の運動不足解消やコミュニティづくりのために仮設住宅の集会所で役立ててもらえないかと、みやぎ生協ボランティアセンターに試作品を送ったところ、「ぜひ送ってください」との返事があり、委員会のメンバーが手作りました。



贈った「玄米ダンベル」。

全国生協からの支援金を使用し、食育活動！

子どもたちに楽しくご飯を食べてほしい（コープふくしま）

ピックアップ！生協の仲間たち



施設・法人アドバイザーの穂積典子さん。

コープふくしま 共同購入拡大グループ 郡山支部 施設・法人アドバイザーの穂積典さんは、食育インストラクター[※]の資格を活用し、福島市、郡山市の保育園、児童施設で、仲間づくり活動と共に食育活動を行なっています。「震災直後、全国の生協さんから送っていただいた支援物資を各施設に持っていくと大変喜ばれ

ました。支援物資を提供する中、今後私自身はどう応援できるのか考えたときに食育活動をやりたと思ったのです」

穂積さんは、現在週1回、それぞれの野菜の効能などを分かりやすく説明したり、伝統食作りを教えたりしています。「活動で使う食材は、全国の生協さんからの支援金で提供させていただいているんですよ」とほほえむ穂積さん。「放射性物質の汚染が心配されている中、家庭ではなかなか『食育』という視点を持つことが難しいのですが、少しでも子どもたちと保護者の方に、食べることに興味を持ってもらいたくて」

さらに、穂積さんは食育イベントにあわせて、生協の食材を提供したり、コープふくしまが取り組む除染の話や内部被

ばく、外部被ばく測定の話なども行っています。「コープふくしまがサポートできることはたくさんあるので、多くの方に生協の取り組みを知っていただく機会にしたいです」。「食べることは命につながる」という思いを強く持ち、「食べ物との上手な付き合い方」を伝える穂積さん。今日も、子どもたちの笑顔のため出掛けていきます！



1月24日に開催された食育イベントの風景。

※ NPO 日本食育インストラクター協会が認定する資格。生涯に渡り食育について指導できる人材を、食育インストラクターとして認定。

支援募集情報

岩手県生協連 軽食付き自習スペース「山田ゾンタハウス『おらーほ』」への軽食支援として、180万円が必要です。可能な金額でかまいませんので、ご支援よろしくお願いいたします。連絡先は、岩手県生協連専務理事 吉田 敏恵さん (019-684-2225) まで。
※ 関連記事：4 ページに掲載。

いわて生協

● 田老町漁協「真崎わかめ」の販売協力。

壊滅的な被害を受けた田老町漁協が、昨年春に収穫した「真崎わかめ」。放射性物質の風評で全国での販売が伸びず大量に残っています。岩手県、いわて生協の検査で放射性セシウムは検出されていません。ぜひ、販売にご協力をお願いします。

連絡先：いわて生協事業本部常務理事 阿部 慎二さん (019-687-1441)。

● 被災地のお母さんたちや福祉作業所などの復興応援商品の販売協力。

震災から2年近くたち、県内ではなかなか売れなくなってきています。委員会単位やイベントなどでの取り扱いなど、ご協力をお願いします。

※ 取り扱い商品のリスト、条件などの資料を提供できます。

● 被災地ツアー（観光を含んでも可能）、被災地ボランティアツアー

ご相談いただければ、企画や準備などのご要望にも応じます。少人数での視察のご要望にも対応します。なかなか進まない被災地の現状をぜひ知っていただきたいです。

上記2点の連絡先：いわて生協組織本部 小野寺 真さん (019-603-8299 月～土 9:00～18:00) まで。



「田老町漁協」(岩手) 真崎わかめ。

みやぎ生協

● ふれあい喫茶で使用のお菓子(各地の名産品など)を募集しています。連絡先は、みやぎ生協ボランティアセンター (022-218-3880) まで。

● 被災された方の手作り品が掲載されている「手作り商品カタログ」のお届けを始めました。ご希望の方は、みやぎ生協ボランティアセンター (FAX 022-218-3663 またはメール sn.mfukushinet@todock.jp) まで。

みやぎ生協ホームページからダウンロードもできます。 <http://www.miyagi.coop/support/shien/handmade/index.html>

● 「全国の会員生協に向けて被災地復興支援ツアー(モデルコース)」のご提案

コープトラベルみやぎでは、「被災地を訪問したいけど、どうすればよいか分からない」などのお問い合わせに応じて、沿岸部での観光、お買い物を含めた団体・グループ向けの被災地視察モデルコースをご用意いたします。ご訪問の日程・人数に合わせてご手配・アレンジいたしますので、まずは電話・メールでお問い合わせください。お問い合わせ先：コープトラベルみやぎ担当：東(あずま)さん、または 高橋さん(電話番号：022-717-5081 メール：高橋 喜信 sn.m30853yt@todock.jp) まで。

【被災地復興支援ツアーのモデルコース例】

旅行代金(お一人様)	大人 34,800 円 / こども(小学生) 32,800 円 / 幼児(未就学児) 30,800 円 (4名様1室でご利用の場合) 3名様1室でご利用の場合は各 2,000 円増し、2名様1室でご利用の場合は各 3,000 円増し ※上記料金は 20 名様以上、中型バス利用で算出しております。人数の増減により旅行代金は変わる場合があります。
発着地	仙台空港の発着を想定していますが、仙台駅からでも可能です。(発着地より添乗員が同行します。)
旅行代金に含まれるもの	バス代金、ご宿泊代金(1泊2食)、昼食代(1日目、2日目)、遊覧船代、拝観料、観光ガイド代、ボランティアガイド代、添乗費用
行程(モデルコース)	宿泊予定ホテル：松島センチュリーホテル ・仙台空港発(10:00) === <仙台東部道路> === 塩釜神社(参拝) === 浦霞酒造 酒ギャラリー(お買物) === 松島海岸(昼食) === 松島散策：「五大堂・瑞巖寺(観光ガイド同行)」・円通院(数珠づくり体験)・松島さかな市場にてお買物 === ホテルへ ・松島海岸(9:50) === 遊覧船「芭蕉コース」(所要 50 分) === マリンゲート塩釜 === 鐘崎笹かま館又は伊達の牛タン本舗(昼食) === 荒浜地区視察 === 閑上地区視察、閑上さいかい市場(お買物) === 仙台空港(16:00 頃)

食のみやぎ復興ネットワーク 「宮城県漁協志津川支所」に漁船・船外機・フォークリフト・わかめ収穫用コンテナを、「JA いしのまき」に海水淡水化装置を贈るため、上記物品、あるいは、支援金を募集。連絡先は、みやぎ生協 藤田 孝さん (022-772-6141) まで。

福島県生協連

● 「福島の子どもの保養プロジェクト」の①スタッフ、②大型連休の保養受け入れ先募集。①は、1カ月単位で毎週末参加可能な方を。②のご提案は、企画(日程、募集対象者、募集人数、スケジュール、参加者負担額等)を明確にした上で、ご連絡ください。

連絡先は、福島県生協連 根本 喜代江さん (024-522-5334) まで(保養の企画、運営、費用は、主催者にご負担いただきます。ご了承ください)。

● 「土壌スクリーニングプロジェクト」ボランティアを募集しています。実施内容は、土壌スクリーニング機についての事前学習と放射線測定です。場所は、JA 新ふくしま管内(福島県福島市)で、1日最大6チームを編成し、1日150カ所の測定を目標としています。応募先は、福島県生協連ホームページ (<http://fukushima.kenren-coop.jp/>) 「福島県生協連」で検索。

Facebook も始めました。「土壌スクリーニング」で検索。

本号外部取材スタッフ：荒川和巳、早坂恵美